
緋織の小さな詩集

露草緋織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋織の小さな詩集

【Nコード】

N5424R

【作者名】

露草緋織

【あらすじ】

麗しく響く旋律、儂く淡い恋人たち、妖艶に咲かす花
t c。
e

。 この世にあるのは、美しいものばかり

恋愛や、自然の雄大さ等を集めて綴っていきます。

『美しいものに1番はない』

永遠の愛という名の旋律（前書き）

短い詩ですが、よろしくお願いします。

永遠の愛という名の旋律

『愛』とは、時に美しいものであり。

また時には、何よりも残酷である

刹那に想いを馳せて。

だが、時々躓く。

そんな時想いは、するり、と手から逃げてしまつものだ。

降り積もる哀しみ。

それを真に乗り越えたとき、茨の道は解かれよう。

そして、愛は美しいものへと変わるのだ。

そしてもう一つ。忘れてはならない。

愛には、もう一つの側面があることを。

踏む手順を誤り、お互いが鬨ぎあったとなれば。

信頼が解かれてしまえば。

茨は濃くなり、光どころか、前すら見えなくなり。

信じていた道は崩れ落ちて。

奈落の底に堕ちてしまうのだから。

どつせなら、誰もが羨む恋をしよう。

永遠に崩れぬ愛を、共に。

奏でようではないか。

永遠の愛という名の旋律（後書き）

詩に挑戦してみました。

楽しんでいただけたら幸いです。

願うのは、甘く優しい夢

優しい瞳で見つめているのは、貴方が好きだから。

優しい声で貴方の名前を呼ぶのは、貴方を愛しているから。

恋心を抱いたときから、今でもずっと。

私は貴方を愛している。

貴方からもらった、甘い接吻。

髪が踊った。

小さな胸が飛び跳ねた。

単純で、何て奥の深い言葉だろう。

大好き。だから。

永遠に醒めない夢の中で。

ずっと。ずっと。

貴方と共にいたい。

醒めないで。醒めないで。

いつまでも。どんなことがあるとしても。

貴方と一緒に居られるのならば。

夢の中でも、構わないから。

永い時間を、海の底で

絡みついた運命は、変えられない。
。

どんなに手を伸ばしても。

君という存在には、届かない

逢いたい。唯、それだけなのに。

それさえも許されない。

それならば、いっそ。

共に、碧い海へ沈もう。

誰にも、邪魔できない。邪魔されない。

2人だけの、永遠の時間を。

昏く、深く、碧い海の底が。

創ってくれるだろうか。

？中に絡みついた、運命も。

取り払ってくれるだろう。

いじまでもいじまの、互いに抱き合っ

今宵、2人で岸壁から身を投げた

。

甘い香りに誘われて

甘い、甘い香り。

蕩ろけるような甘い蜜快樂を求めて、探し回る蜜蜂わたし。

やっと見つけた甘い蜜快樂に溺れるの。

甘美な夢に酔いしれて。

幸せいっぱい蕩けそう。

癒してくれよう。

私の瞳を真摯に見つめながら。

愛してください。

明瞭な、確かな言葉が欲しいの。

愛してください。

私を不安にさせないで。

愛してください。

いつも、いつまでも傍に居てください。

貴方が私を本当に愛してくれるのならば、私も貴方を愛すでしょう。

妖美な花弁を散らせましょう。

愛してください。

今宵、1つになりましょう……。

彩り、そしてアナタ。

妖艶に甘美な香りを放つ花。

どんなに華やかでも、『それ』は永遠じゃない。

だからこそ、その儂い花を守るつと。

そんな想いは、更に花を美しく魅せるのだ。

沢山の想いに彩られた花達。

そして。

やがて、『それ』は永遠になる

。

煌々とに光り輝く花

。

色鮮やかな、しおらしい花

。

色気を醸し出す、妖美な花

。

どれが、
嬶やかな私に然るべき花なのかしら

……？

裏探し

溜息が出るほど、今宵も深く。

漆黒の闇を押しつけて、鮮明に浮かび上がるのは・・・。

月。

恍惚と、淡い黄蘗色の月を仰ぐ。

嗚呼、何と綺麗なのだろう。

周りの闇が溶けるように、吸い込まれるように。

時間が立つほど、優美に存在を示す月が絶世だと感嘆してみたり。

獣すら恐れる闇黒を、容易に我が物とする月を恐れてみたり。

ねえ、美しいモノの本当の姿って本当に美しいモノなの……？

絶賛される麗しい月でも。

裏の『顔』があるかもしれない

。

愛せる分だけ

遠くの『愛』に、幻想を抱いて。

運命の廻りあわせを待ち焦がれて。

どれほど、貴方を待っていたことでしょうか。

どれほど、貴方を想って頬を濡らしたことでしょうか。

薔薇の、幾度も複雑に重なり合った花弁のように。

私の小さいけど、段々膨らみ大きくなる恋心も、
複雑に色々な想いが重なり、絡む。

入り組んだ迷路のように。

1つしかない出口には、沢山の罫が詰まっている。

1歩踏み出す度に、心臓がトクン、と鐘を打つ。

時に迷い、悩みながらも。

不思議と前へ、前へと足が進む。

分かる。

分かる、この先には、貴方が居るのが。

荊棘迷路の道に、
甘美貴方なヒカリが差す。

貴方に想いが通じて、
会えたとき。

謙虚な愛で、
荊棘が消える。

辺りには、
柔らかな旋律が響いて、
周りの空気までも
嫺やかに染め
かえる。

愛せる分だけ。

貴方が許してくれるだけ、愛します

。

夢硝子の欠片（前書き）

遅くなりました。（4 / 14）

夢硝子の欠片

艶やかな想いが、粉々になって、

……割れた。

夢硝子の欠片は彼方此方に飛び散って。

嗚呼、一体いくつあるの………？

微に入り細に入り、集めても集めても。

まだ未完成。

焦って、夢硝子の欠片の鮮やかな色が抜けて、枯れていく。

枯れた色を戻そうと、瞳から透明の水が零れ落ちる。

涙は^水周りに水玉模様を描く。

……私だけの夢硝子の欠片……。

欠片。

水が夢硝子の欠片に落ちて、吸い込まれていく。

何も見えなかった夢硝子の欠片が、だんだんぼやけてきて
…。

色と熱を帯びた。

それは七色の光を放つ、
小さいけど大きな欠片。

未完成でも構わない。

私はそつと、ほんのり温かくなった小さく大きな夢硝子の欠片を
強くつよく抱きしめた。

出逢いは暁方のあと

私に見せて
。

その無垢なる花弁が、惜しむ間もなく散っていく無様な姿を。

紅が酸素に触れて。

あの美しい鮮やかな色からは想像もできない、不気味な赤黒に変わっていく哀れな様を。

ええ、ええ。

分かっているわ。

私の薔薇の華の如き、妖姿媚態なこの軀も。

見苦しくも、哀れで美しくもあるこの華のよつに。

萎^{しお}れて、朽ちていくのね。

お互い、誰にも。
求められることは なかったわね。

草クサ臥スれて色褪シせて。

あかつきがた
暁方あかつきがたには、お互い命いのち尽つきるじつでじょう。

生き方も、同じなら。
死に方も同じなのね。

とても、残酷。

美しいモノが、永遠ではないなんて……。

私もアナタも、花孤独一人ぼっちな者同士だから。

お互いが、お互いの居場所となるように。

一緒に静かに、この世から消えましょうね……。

永遠への幻想（前書き）

お久しぶりなのです。

テストも終わって万々歳なのです！

……点数は万々歳じゃないけども。

永遠への幻想

永遠の別れ。

弱々しく手を伸ばすも、指は虚空を搔く。

舞い降りてくるのは、天使か悪魔か。

何処にも行けず、そこに佇む。

汝、そこにいるのか…？

深紅の華は幾度も花弁を震わせ、散る。

幻想は色も温もりも失う。

汝が与え、我が生み出した世界は。
今や小さな深紅の花弁があるのみ。

小さな、ほんの小さな綻び。

傷、そして
壊滅。

汝よ、我と永遠に。
今度は虚空など搔かない。

今度は汝の白い指を。

捉える。

幻想。
永遠、そして汝への。

淡い、愛。

蝉の抜け殻

見失つた黒い箱。
ロストし

舌に感じるのは。
じやりじやりとした味のない物体。

聞こえるのは。
蝉の鳴き声と。
ヒメイ
鈍く鈍めいて廻る 錆びた古い車輪。

鼻をつくのは。
えげつない悪臭を放つ腐敗した死肉。

手に伝わるのは。
雑菌だらけのざらざらに乾いた心臓。

目に映るのは
。

自我を完全に失った、
己の姿。

箱。箱は、何処だ。

私の^{理性}五感を閉じ込めた黒い箱。
私の世界の全てを閉じ込めた呪いの箱。

見つからないのは、子供だからか。
大人になりきれしていないからか。

『命を奪った分だけ、君は強くなれる』

脳を雁字搦めに縛り付けられたせいかな。

血肉、内臓、命。

時間に任せて、膨らむのを待つ。

黒い箱は自分の傍に。
存在を明かし始める。

だが開かない。
何が足りナイ

……？

箱、私の全てを閉じ込めた黒い箱。
精一杯背伸びしても開かない。

時間という鍵を得て。

鎖が解かれ、感覚が蘇る。

脱皮 『子供』という感覚を脱ぎ捨て。

『大人』に生まれ変わる。

黒い箱は私に向かって呟く。

「共に寄り添った命の分だけ、君は強くなる」

輪廻は絆を照らす

こんなにも直向きな光を。

手の中で優しく温めていたのは、いつだったただろ

う　　？

逃げて、追いかけて。

最後には何をしているのか分からない。

幾つもの時が流れても。

私はまだ確かなものを得られぬまま。

いつまでたっても探し物ばかり。

足元は不安定に揺れる。

感情は逃避する。

何かを恐れて、何かを目指して。

確証のない現実には。

答えなどありはしない。

助けてほしいの？

1つになりたいの？

好かれないの？

それとも、

確かなモノが欲しいの

…？

終わりになき輪廻。

そう、私が欲しいのは。
確かな「愛」。

逃避愛を続けていた感情は。
ようやく止まった。

そして私の心の中に。

これまでも、これからも。
熱を帯びて。

私たちを灯してくれるでしょう……

。

輪廻は絆を照らす（後書き）

またまた久しぶりですね。

夏休みに入りました。

皆様、暑さに負けずお過ごしください。

甦生

掴み損ねて、錯綜する。
混沌とした中に軋轢が生じる。

何のためにこの世を駆ける？
利害の一致。

感情制限はあらゆる音を忘れる。

これはいつまで静謐か。
独自性、毒持性…？
ありきたりな効能。
それは人を惑わせる、不思議な魅力。

逃避する能力は、楽に。
制限する能力は、苦に。

絞り出す声は、刈り取られる。
狂った時計に、色。
全ては、誰のために？

盲目。感觸。

狂言みちた歌声は、海に沈む。
心地よい水温と光は、全身を麻痺させる。

愚者よ。

何と引き換えに？

臓器か、心か。

手放す音は、あまりにも残酷。

愚者よ。

ぬるま湯は、一瞬で凍りつく。
宿命さかとは何か。

愚者よ。

この身は穢れた。
描く道を再び歩めるか。
心臓はこの手に。
これは、誰の物か？

安寧は答えない。

『解』は誰にも分からない。

忘却、隠滅。

忘れることも、隠すこともできない。

それは、1つの個体だから。

汚泥にまみれた心臓は。

海に洗われて、綺麗になつて。

再び輝く瞳を、与えてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5424r/>

緋織の小さな詩集

2011年10月8日18時44分発行